

昔の友

斎藤 恵子

東京で学生時代の女友だちと会うこととした。岡山の大学を卒業してから40年あまり。その間に一度会ったきりだった。友人は名古屋出身で現在は東京住まい。私はずっと岡山にいる。所用で東京に行く折、ふいに会ってみようと思いついた。

電話をしたら

「まあ、どうしているの。会いたいわ。ずいぶん会っていないわね」
昔のままのゆっくりとした口調でいう。

「10年ほど前に一度会ったきりよね。仕事は忙しいの？」

私立大学の非常勤講師をしていると年賀状にあったので尋ねた。

「忙しいことはないわ。独りだから好きなようにしているの」

友人は夫を亡くし都内で独り暮らしである。

東京国立博物館で会うことにした。史学科の同級生なのでお互い好きな場所だろうとそこにした。

入口の入場券売り場の前でスエットの黒。パンツ姿でリュックを負っている女性がいる。私に「ここよ」というふうに手を挙げ振った。昔のままの笑顔だ。

「元気でよかったわ」

私はそういつたけれど、どうやらそうではないようだ。足を引きずっている。だからパンツにスニーカーなのだ。以前は長身を上質のスーツで包んでいたのだが。

「リウマチなのよ。でも大丈夫」

階段を上る時は手すりを持ち、一段一段上る。歩調もゆっくりである。

「独り暮らしだから、勤めにも行けるし、食事でも面倒な時はコンビ

ニで済ませることもできるし」

楽しげにいう。病気の心配より仕事や好きなことを考えているようだ。その様子にほっとした。休憩コーナーのソファに掛け、会わなかった間のことやほかの友だちのことなど話し込む。

そしてびょうぶや仏像や土器など見て回った。

「完全な形で残っているのはすごいね」

などいいあう。なんだか学生時代に戻った気がする。

「このごろ九津見房子関係の本を読んでいるの。岡山の人よ」

私は今関心のあることを話した。

「あの人は岡山の人だったの？」

かの人を知っている人がいてうれしい。女性だけの社会主義者の会、赤瀾会（せきらんかい）のことやゾルゲ事件のことなど共通の出来事のように話す。

帰り際、リュックから包みを出して私にいう。

「荷物になるかもしれないけれど、評判のまんじゅうよ」

手土産を忘れない律儀さも昔のままだ。昔はよく名古屋のウイロウをもらったことを思い出した。

「ありがとう。私もあるのよ。おかずにしてね」

私は岡山のママカリの酢漬けの包みをカバンから出した。

「あらっ。岡山から名古屋に帰省する時よくお土産にしたものだけわ」
私たちはほほ笑み合った。互いにもらったものを押しいただいた。穏やかな春の一日だった。

作者 斎藤恵子

題名 昔の友

山陽新聞夕刊

2019.05.09

掲載